研究所だより

第３９５号
２０１８年１２月２１日
発行：土佐清水市教育研究所
ＴＥＬ　８２－３０１５

“ もう　いくつねると　お正月　　お正月には　凧あげて
　こまをまわして　遊びましょう　はやくこいこい　お正月 ”

『 お正月 』　1900年　唱歌　　滝 廉太郎

～ 冬来たりなば、春遠からじ ～

今年もいよいよ押し詰まりました。暦の上では２２日は、冬至（１年で一番昼が短く、夜が長くなる）。冬の中間点にあたりますが、寒さはこれからが厳しくなり、本格的な冬の到来となります。体調管理には十分留意して、年末年始をお過ごしください。

☆第５回教研推進委員会（委員長：岩井 圭先生）

１２月　３日（月）に第５回教研推進委員会が開催されました。協議内容を報告します。

（１） 半日教研の総括について

①日程について

・「１１月は多忙な時期なので他の時期にならないか」
　１０月も教育文化展等の取組や陸上記録会の取組などがあり多忙な条件は同じである。

②時間構成について

・給食の時間を考慮して開始時刻（13:45）を設定していただけて良かった。
・給食をカットして４校時の日程で行った。この日程で良い。
・「中学校の勤務時間が１６：３５になっているが小学校に合わせている。今後終了時間についても検討してもらいたい」
　県教委主催の研修も終了時刻は１６：４５か１７：００に設定されている。各校の勤務態様がバラバラなので設定が難しい。１０分程度の超過は許容範囲として捉えていただきたいとのこと。市教研としても今後県の意向に準じて取り組みたいのでご理解をお願いしたい。

③その他

・「部会構成を見直す転換期になっているのではないか。部会構成に偏りがあり、小中連携につながっていない」
　協議の結果：「部会成立は、５人以上並びに複数校以上の部員を必要とする」

（２）平成３１年度組織教研開会行事（内容・部会構成）について

①内容：「開会、教育長挨拶、推進委員長挨拶、日程説明・連絡事項、閉会」
　　推進委員長挨拶－本市の教研の歴史、取り組み等について触れる。
　　日程説明・連絡事項で学校数・教職員数・児童生徒数等について紹介する。

②部会：H29年度14部会（3人部会；音楽・家庭）、H30年度12部会（3人部会；図工）

・教研は、もともと資質・指導力の向上を図るため、部会を設定し研修を行うことで教育実践に役立てている。
・小中連携を重視した部会編成を考えるべきである。

※平成３１年度
　平成２６年度教研推進委員会の結論の一部を修正する。

平成３０年度教研推進委員会の結論
・部　　会；従来の部会を基本とする。（各教科、問題別）
・部会構成；部会成立は、５人以上並びに複数校以上の部員を必要とする。

（３）平成３１年度の一日教研日程について

・日時　平成３１年　８月　７日（水）午前開催予定　**＊開催時間については来年度決定**
・会場　土佐清水市立中央公民館
・講演　※講師については交渉中

（４）平成３１年度教研推進委員

地区（所属）	所属（役職）	役　職	備考
中央Ⅰ地区	清水小学校	委　員	
中央Ⅱ地区	清水中学校	委　員	
西部地区	下川口小学校	委　員	
東部地区	下ノ加江小学校	委　員	
渭南教組	（教文部長）	委員長	
校長会	（校長会代表）	副委員長	
教育委員会	（指導主事）	事務局	
教育研究所	（研究員）	事務局	
教育研究所	（主任研究員）	事務局	

（５）平成３１年度の教研日程について

・組織教研　　５月　８日（水）
・一日教研　　８月　７日（水）
・半日教研　　１１月　６日（水）

お知らせ

＝委託事業（教研各部会・研究協力校・各校等）の提出物期限について＝

○各部会

部会決算書	１２月２５日（火）
事業実績報告書	１月２８日（月）
総括教研部会報告書	１月２８日（月）
研究集録原稿	１月２８日（月）

○各校（校内研究）

研究集録原稿	１月２８日（月）

○研究協力校等

研究集録原稿	１月２８日（月）
決算書・実績報告書	２月　８日（金）

※部会決算書について（5/14 市教研各部長・各研究会代表者会で説明済み）
１２月末で会計整理をして、残った予算については事務局に返金をお願いします。

〈委託事業：研究協力校公開授業・研究発表－幡陽小学校－〉
～「平成30・31年度 高知県実践的防災教育推進事業」拠点校 ～

〇「防災教育研究発表会」

期　日：平成３０年１１月２９日（木）

講　師：大木 聖子先生（慶應義塾大学 環境情報学部 准教授）

佐藤 敏郎先生（小さな命の意味を考える会代表）

演　題：「　３．１１を学びに変える　」　　※講話・資料より

幡陽小学校は、「平成30・31年度 高知県実践的防災教育推進事業」の指定を受け、南海トラフ地震に備えた防災教育の充実を図るため、市危機管理課をはじめ関係機関と連携しながら避難訓練の実施、防災教育に関する指導方法等の開発・普及等に取り組んできました。その一環として「防災教育研究発表会」（参観日）を設定しました。

５校時は、１・２年「つなみからみをまもるには」、３・４年「登下校中に大地震が起きたら」、５・６年「避難所生活を考えよう」の授業を公開していただきました。どの学年も自分のこととして真剣に考え、活発に話し合い、意見発表をしていました。特に印象に残ったのは、５・６年生が中学生による防災授業で教わったこと、一緒に考えたことを発表していたことです。このことからも防災教育の取組が小学校から中学校へ、そして地域とつながり、広がっていくことで防災意識や防災力が高まる契機になっていると感じました。

もう一つは、防災ソングの取組です。１・２年生が言葉をひろい、６年生が言葉を集め、それに詩を編み、曲をつけ、みんなで作り上げた防災ソング。矢野川校長のギター演奏に合わせてカントリー調のリズムで軽快に熱唱しました。続いて深原研究主任が、この１年間の実践について発表を行いました。先ず研究主題を「自ら判断し主体的に行動できる子どもの育成」と設定し、大木聖子先生（慶應義塾大学環境情報学部准教授）の指導・助言をいただきながら公開授業や防災講演会（参観日）、あらゆる状況下での避難訓練、地区防災組織と共同しての避難所運営マニュアルづくり等の取組について経過報告をしました。

報告後は、大木先生から公開授業についてのコメントをいただき、この日のもう一人の講師である佐藤敏郎先生にバトンタッチをしました。

「東日本大震災により７４人が犠牲になった石巻市立大川小学校で次女を亡くした佐藤先生がマイクを握り「歌がすばらしい。この歌で地域や全国の人々を救うかもしれない。」と語り始めました。

「大震災は日常を襲う・奪う。あの震災で１０人に一人が犠牲になった。平成２３年、私は、牡鹿半島の女川の中学校に勤めていた。何もかも流された町でスタートした新学期。この前まであった建物が跡形もない、笑って声を交わした人もいない。教師は生徒を励ます仕事なのだが『頑張れ』なんて言えない日々が続いていた。そんな５月、生徒に俳句を作らせようという提案があり、授業を担当した。町はまだ瓦礫に埋もれ、家族を亡くした生徒もいる。『素直な気持ちを五七五に』と言われたが、そんなことをしていいのかと、直前まで大いに迷った。不安は的中しなかった。生徒は、私の説明が終わるやいなや、指を折りながら五・七・五の言葉を紡ぎ始めた。まるで魔法がかかったかのように・・・。

どんなことを書いているのだろうと机をのぞくと、こんな句が目に飛び込んできた。

『　見上げれば　がれきの上に　こいのぼり　』

『　逢いたくて　でも会えなくて　逢いたくて　』

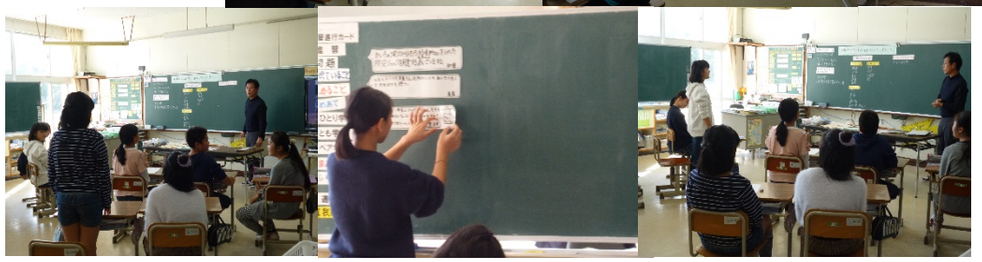
たった十七音の文字を並べただけなのに。津波の威力、悲しみ、無力感、希望、…すべて伝わってくる。俳句は字数が限られているので、言葉を吟味することになる。生徒たちは必死に言葉を探した。自分の心を探したのだった。『これだ』という言葉にたどり着いたとき、前へ進める何かが生まれたように思う。あの授業で、悲しみに向き合う大切さを教えられたのは、私自身だったんだと、最近になって気づいた。

震災後の被災地の学校現場で一番考えたのが生徒を３・１１にどう向き合わせるかということだ。そんな中、いずれも家が流された３人の中学３年生と出会った。１６歳の等身大の言葉は、想像以上に鮮烈だった。『次の命を救いたい』『体験した人しか語れなかったら、戦争はとっくに風化してしまう』『私、生きていてもいいじゃん』そして、語ることは、親友の死を無駄にしない方法かもしれないと考えるようになった。彼らが語るその先に未来が見えてくる。いつの間にか希望の話になる。防災とは、『あの日を語ることは、未来を語ること』なのだ」と。

最後に大川小学校での惨事、津波到達の直前まで校庭に留まり、裏山に避難せず、最後の１分で高台にある橋のたもとに避難を始めて津波に襲われた当時の状況を説明してくれました。「命の意味づけ－『救えた命　救うべき命　救ってほしかった命　救いたかった命』子どもの命・先生の命を無駄にしないで。時間・情報手段だけでなく行動・判断が大事。だから『念のために』逃げる。人間の都合で考えない。地球の都合を思うことが『念のためのギアを上げることになる』」と力強く締めくくりました。

1・2学年

3・4学年



5・6学年

～あすなろネットワークの取組～

１１月２９日（木）第４回あすなろネットワークを開催しました。東大阪市にあるＮＰＯ法人発達障害サポートセンターピュアの副センター長の種村祐太さんを講師にお招きし、「発達障がい傾向のある子どもへの学校でのサポート方法」と題し、見え方や聞こえ方の疑似体験を交えた講演をしていただきました。

世界的に有名なスティーブ・ジョブズ氏やスピルバーグ監督は、発達障害があることでも有名です。慶應義塾大学法学部を卒業しているタレントのミッツマングローブさんは、文章を暗記することが苦手だそうです。たくさん覚えることがある法学部で、どうやって暗記することができたのでしょうか。それは、文章を絵や音に置き換えて頭の中で何度も繰り返すのだそうです。種村さんはミッツさんの例から工夫をすることの大切について話してくださいました。

日常生活の中で「ちょっと待って」と言うことはありませんか。発達障害のある子どもには、この「ちょっと」が分かりません。「5分待って」「12時まで待って」タイムタイマーを使う等、具体的な提示の仕方が効果的です。いくつかの言葉を絵に表す演習をしました。「りんご」や「歩く」等の言葉は絵に表すことができましたが「ちょっと」「ちゃんとする」は皆さん頭を悩ませていました。絵で表現できる言葉は誰もが分かりやすいけれど、絵で表現しにくい言葉は発達障害の人には伝わりにくいので、絵で表現できるような具体的な説明が必要だそうです。見え方の違いも様々で、一部分しか見えないシングルフォーカスの人に後ろから声をかけることは、暗闇のお化け屋敷の中で声をかけられるようなものという例を挙げてくださいました。そう考えると、とても怖くパニックを起こして当然だと思います。前から話しかける、見てほしいものを目の前に持っていく、「〇ページ開けて」と言うだけでなく目の前に教科書を持っていって「〇ページ開けて」とそのページを開けて見せる、ルールや、手順をイラストや写真で提示する等同じことでも少しだけ対応を工夫するだけで変わってきます。

種村さんの講演の中で何度もでてきた「少しの工夫」。視覚的、具体的、肯定的に支援をすることで自信をもっていきいきと生活を送ることができます。そのためには、周囲の理解や適切な支援、人として認めてくれる環境が必要だとおっしゃっていました。
同時に「～したらダメ」と否定をせず、褒めること肯定することはなかなか難しく簡単にはできないので、支援する側の訓練も必要だということもおっしゃっていました。

〈感想〉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

- 周りの子どもと違うと何か発達障害があると、ひとくくりにしてしまいがちなんではと最近しっくりいかなかったりしていました。発達障害の困り感だけをクローズアップするのではなく、その子どもたちが持ち合わせているプラスの特性をどう見極めて伸ばしていくかを大切にしたいと思います。困り感を改めて体験できたことで、子どもたちに接する仕方が変わりそうです。
- 見え方や聞こえ方の疑似体験もあり、自分とはまた違った感じ方の実体験をすることができとても参考になりました。以前、本で「困った行動に対して、なぜそうしてしまうのかを考える必要がある」と書かれていたのですが、今回のような疑似体験をして困る要因を知ることは“なぜ”を考えるうえでとても重要だと改めて感じました。
- 今日は発達障害のある子どもへの理解がより深まったとても良い研修会になりました。また、当事者たちはこんな風に見えたり聞こえたり、普通に生活するだけでもたくさんの努力をして困っていることに向き合って生きているのだと思いました。実際に疑似体験をして、全体を見ることが難しかったり、思い通りに体を動かせない不自由さがとてもイライラして、たったこれだけのことにこんなにもストレスを感じて生きているのだと分かって、これからの対応や関わりを大切にしていきたいと思いました。これからも一つひとつ研修を大切にしより学びを深めていきたいと思います。

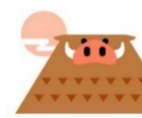
〈委託事業：研究協力校の取組『地域との連携・協働』－三崎小学校－〉

三崎小学校では、「『地域との連携・協働』を通して自立する児童の育成」を研究テーマに設定し、総合的な学習の時間や社会科等の時間を中心に、地域の方々との豊かな出会いを通して地域の方の温かさや自然を再発見し、児童の自立を目指す取組を実践していただいております。その一環として「田植え（米作り体験・収穫・餅つき大会）」などの体験活動を通して、山と川のつながり、人々の暮らしを考える取組を行っています。２０日（木）には地域・保護者の方々にも協力してもらい全校餅つき大会を開催しました。地域の方々から「米の蒸し方、つき方、ちぎり方、丸め方」など「伝え残したい知恵」などを授かりながら力いっぱいに杵を振り、丸めました。最後は上級生がきちんと片づけをして終了しました。

～ ２０１８年の漢字は「災」～

公益財団法人　日本漢字能力検定協会は、１２日に「今年の漢字」を発表しました。このイベントは、１２月１２日の「漢字の日」に一年を振り返り、漢字の奥深い意義を再認識していただくための活動の一環として、毎年年末に今年一年の世相を表す漢字一字とその理由を応募し、最も応募数の多かった「今年の漢字」が決まります。京都市・清水寺の森清範貫主の揮毫により「災」と発表されました。

応募者が選んだ理由として、「北海道・大阪・島根での地震、西日本豪雨、大型台風到来、記録的猛暑などの自然災害により、多くの人が被災した。災害の経験から全国的に自助共助による防災・減災意識も高まり、スーパーボランティアの活躍にも注目が集まった。仮想通貨流通、スポーツ界でのパワハラ問題、財務省決裁文書の改ざん、大学不正入試問題などの事件が発覚し、多くの人がこれらの出来事を人災と捉えた」などが挙がったようです。

新元号となる新年が安心して暮らせる年であってほしいですね。（2019年５月１日改元）

皆様おそろいにて、良き新年をお迎えください
２０１９年がお互いの飛躍の年で
ありますようにお祈りいたします